

【論 文】

## 弥生時代西日本における副葬水晶製玉類について

平郡達哉\*・建神結香子\*\*

(\*島根大学法文学部、\*\*公益財団法人松江市スポーツ・文化振興財団)

### 概 要

本稿では、弥生時代西日本における副葬水晶製玉類について、資料集成、分類、変遷案の提示といった基礎的作業を通して、当該期の水晶製玉類副葬風習の様相を明らかにすることを目的とした。副葬水晶製玉類は、稜の有無と最大径・高さの比率によって、有稜Ⅰa式、有稜Ⅰb式、有稜Ⅱ式、有稜Ⅲ式、無稜Ⅱ式、無稜Ⅲ式の6型式に分けられる。西日本における水晶製玉類の副葬は中期中葉の北部九州で始まり、後期以降本格的な副葬が行われる。後期前半には中四国地域、後期後半には玄界灘沿岸地域が副葬の中心地となることを指摘した。

副葬の様相については、出土状態から4つの様相が見られ、主に頭飾か耳飾の部材として使われたと考えた。また、水晶製玉類の副葬と他材質の玉類とのセット関係から、後期後半から終末期にかけて、北部九州・瀬戸内海沿岸の遺跡で水晶製玉類+翡翠製勾玉+碧玉製管玉+ガラス小玉という一定のセット関係を形成することを指摘した。

キーワード：弥生時代、西日本、副葬、水晶製玉類

### はじめに

弥生時代における副葬文化において、水晶製玉類の使用は北部九州地域の弥生時代中期中葉から見られる。当該期の水晶関連考古資料には製作遺跡で出土する未成品と墳墓遺跡において出土する副葬品がある。弥生時代における水晶製玉類の製作遺跡については京都府奈良岡遺跡(河野・野島2003)、鳥取県西高江遺跡(湯村2017)、同県久蔵峰北遺跡(財団法人鳥取県教育文化財団2004)、島根県平所遺跡(松本・三宅1977)、福岡県潤地頭給遺跡(前原市教育委員会2005・2006)、同県城野遺跡(北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室2013、谷澤2013)等での調査成果を基にした報告と研究が行われている。

本稿では、弥生時代墓制の副葬品としての水晶製玉類に注目し、資料集成、分類、変遷提示といった基礎的作業を通して、当該期の水晶製玉類副葬風習の様相を明らかにし、その時空的特徴を述べることを目的とする。

### 1. 弥生時代の水晶製玉類に関する研究動向

まず、日本列島における弥生時代の水晶製玉類に関する調査研究動向についてみてみる。下

記でも述べるが、製作技法や生産体制を物語る調査や研究が水晶玉研究の軸をなしているが、ここでは墳墓出土水晶玉と関わる調査・研究成果を中心に整理してみる。

弥生時代の副葬水晶製玉類については、1950年代に福岡県日佐原遺跡における石蓋土壙墓での出土事例が報告されはじめたことで知られるようになった(鏡山・渡辺1959)。その後、1970年代から80年代初頭にかけて、出土事例報告が増加していった中で、1977年に生産遺跡である島根県平所遺跡が調査され、完成品の出土はないものの製作工程が示されたことは(松本・三宅1977)、弥生時代における水晶製玉類の研究、特に製作・生産研究の嚆矢となった。1982年に同じく生産遺跡である鳥取県西高江遺跡が調査された。同年、清水真一は山陰における弥生時代の玉生産の流れを整理する中で、平所遺跡と西高江遺跡が検討され両遺跡の比較を行った(清水1982)。

1992年、河村好光は弥生時代後期から古墳時代の出雲の玉作について検討する中で、西日本の水晶製玉類の出土例と平所遺跡の未成品との関連について言及した。北部九州から瀬戸内にかけて分布する水晶製玉が縦長なのに対して平所遺跡では径が長さより大きい横長の形態が主流であったと示した(河村1992)。

1992年以降年次的に実施された京都府奈具岡遺跡において、弥生時代中期後半の水晶製玉類製作遺跡が調査されたことは、弥生時代の水晶製玉類研究に重要な転換点となった。つまり、調査担当者による一連の報告、研究によって、日本海沿岸地域での水晶製玉類製作の開始時点やその製作技法、さらには鉄器との関連性をふまえた交易にいたる幅広い知見が得られることとなった(田代1993、野島・河野2001、河野2000・2006)。また、副葬品としての水晶製玉類の関係性については、奈具岡遺跡の水晶製玉類の供給先は明らかではなく、西日本で出土した水晶製玉類の多くは奈具岡遺跡のものとは異なり、かつその生産量に比較して出土例が少ないことを指摘した。反面、韓半島南西部では原三国時代の水晶製玉類の副葬例も知られていることから、鑄鉄脱炭鋼の入手なども考慮してその交換財として韓半島南部へもたらされた可能性を示した(野島・河野2001)。

2001年、会下和宏は弥生時代における玉類副葬の時空的特徴について論じるなかで、特に副葬位置、副葬状態に対する詳細な分析を通して、西日本から関東南部地域にいたる広範囲の玉類副葬の変遷を示した(会下2001)。

2002年には高橋進一が水晶製玉類製作の展開と韓半島との関連について言及した。平所遺跡で新たに製作されるようになった長軸の短い切子玉状製品について、同様の製品が平壤貞栢洞3号墳などの楽浪古墳から出土していることなどから韓半島との技術・製品の交流が強かったことがうかがえるとした(高橋2002)。

そして、2004年には寺村光晴が『日本玉作大観』で日本の玉作りについて整理し、水晶製玉類の製作についても言及している。ひとまずここで水晶製玉類の製作については体系的に整理されたといえる。

2009年、米田克彦は穿孔技術に着目し、その変遷と地域性を明らかにした。その中で弥生時代から平安時代の水晶製玉類について穿孔形態を基にした分類を行っている(米田2009)。

2010年には河村好光が法量を基に(河村2010)、2011年には大賀克彦が水晶製玉類の穿孔道

具・穿孔方向に着目し水晶製玉類の型式分類について検討した(大賀2011)。また、大賀が分類したC類(直径よりも高さが大きく縦長な形状を呈し、直径が5～7mm程度、鉄針によって片面穿孔されるもの)について、谷澤亜里は北九州市城野遺跡などが生産遺跡と考えられるとした(谷澤2013)。

2015年に中村大介は日韓の石製玉類の流通について検討した。水晶製玉類については、野島永・河野一隆によって提示された、奈良岡遺跡の水晶製玉類が韓半島の鉄と交換財になったのではないかという見解に異論を唱えた。韓半島で関係がありうる資料は原三国時代中期後半の昌原茶戸里69号墓の資料であるが、弥生時代後期中葉に併行するこの段階には、水晶製算盤玉は副葬されない。中期後葉～後期前葉までの丹後地域の水晶製品は瀬戸内地方と近畿地方で消費されており、韓半島との交換財ではなく、日本列島での消費が主だと結論づけた(中村2015)。

以上のように、弥生時代西日本における水晶製玉類については墳墓副葬品として知られるようになった後、山陰地域で製作遺跡が調査されたことから、その製作技法を中心に議論が進められた。なかでも1997年に報告された奈良岡遺跡7・8次調査の成果は水晶製玉類の製作が日本海側で弥生時代中期後半まで遡ることを述べ、その特徴的な製作技法を提示したことは、弥生時代水晶製玉類研究においてひとつのエポックメイキングとなった。

2000年代以降には、河村好光、大賀克彦、米田克彦らによる一連の研究によって弥生時代の玉作に関する体系的な研究が進む中で、水晶製玉類の製作技法や型式分類についても言及がなされてきた。上記のように生産遺跡、製作技法を中心に研究が進展してきたが、一方で水晶製玉類の使われ方、特に墳墓での副葬様相については生産遺跡に対応する消費遺跡でのあり方を考える際に整理が行われてきたものの(河村1992:2010、会下2001)、集成をふまえた詳細な基礎的作業は手つかずの状態にある。また近年、韓半島において弥生時代併行期の水晶製玉類の墳墓副葬事例が多く調査され、その基礎的な研究成果(楊2019)も披瀝されており、将来的には韓半島出土品との比較研究を通して、日本列島出土水晶製玉類製作・副葬との関係性把握などが可能になると思われる。そのためにもまずは日本列島内における副葬水晶製玉類の様相を把握するため、本稿ではこれまでの研究成果を踏襲しつつ、日本列島内での副葬水晶製玉類について今一度整理して型式分類と変遷を示し、副葬風習の時空的変遷を提示することとする。

## 2. 弥生時代西日本における副葬水晶製玉類の出土現況

まず、弥生時代西日本における副葬水晶製玉類の出土状況に整理しておく。2020年10月時点で確認できた関連資料は19遺跡82点である(表1)。

### (1) 西日本内における出土地域の様相(図1)

水晶製玉類が出土した弥生時代の遺跡は34遺跡に及び、対馬や壱岐から北部九州、瀬戸内、北部近畿から大和、中部高地、関東に点在している。弥生時代中期初めに現れ、同時代後期末に普及する。

表1. 弥生時代西日本における水晶製玉類出土墳墓一覧

所在地	遺跡名	遺構名	時期	出土状況	数量	型式	特徴・備考	相伴玉類	文献
長崎県対馬市上対馬町古里字所陽	塔の首	2号石棺墓	後期前半 ～中頃	棺内遺物→銅釦1、管玉1、水晶玉1、ガラス小玉およそ1400、土器3	1	有稜Ⅱ	小形聚玉(長さ0.7mm)中央部に鈍い稜。片面穿孔。	碧玉管玉1、 ガラス小玉1400	長崎県教委1975
長崎県対馬市峰町坂本ヨケジ	木坂	5号石棺	後期末	床面の南側の短脚壁近くに、水晶玉1、ガラス小玉200	1	有稜Ⅰa	長さ11.8mm、幅11.6mm。両面穿孔。	ガラス小玉20	坂田邦洋1976
長崎県対馬市美津島町久須保蔵ノ本	かがり松鼻	石棺	後期前半 ～中頃		4		30	ガラス小玉	美津島町1988、大賀2009、台澤2019
長崎県志岐市芦辺町深江栄触・久保B区	原ノ辻原ノ久保B区	1号甕棺	後期後半 ～終末期		1	有稜Ⅲ	鈍い稜線	ガラス小玉	長崎県教委1978
長崎県平戸市大久保町蜂久保	田助古墳	石棺?	後期後半 ～終末期		1				樋口・釣田1951、台澤2019
佐賀県唐津市半田字天神ノ元	天神ノ元	K-1甕棺	後期前半		1	有稜Ⅱ			唐津市教委2004
佐賀県鳥栖市元町字内畑	内畑	SJ07甕棺墓	後期前半		2	無稜Ⅲ			鳥栖市教委2003
福岡県糸島市三雲	三雲八龍 I-18地区	1・2号土壇	後期後半 ～終末期		4	有稜Ⅱ		ヒスイ勾玉、碧玉管玉、ガラス小玉	福岡県教委1983
福岡県福岡市南区日佐4丁目	日佐原B群	15号土壇	後期後半 ～終末期		21			ヒスイ勾玉、碧玉管玉	鏡山・渡辺1959、谷澤2019
福岡県福岡市西区吉武	吉武樋渡	3次調査 1号木棺	後期 中期後半 ～終末期 後期初頭?		2	有稜Ⅲ		碧玉管玉16、 ガラス小玉35	福岡市教委1996
福岡県若手郡軟町新北入生高木	高木	D7号土壇墓	中期中葉	副葬品としてほぼ果を頭とした場合、頸部に水晶玉2、管玉11、ガラス小玉8	2	無稜Ⅱ	長さ22mm、径18mm、孔径4.5mm。両面穿孔。	碧玉管玉11、 ガラス小玉8	福岡県教委1978
福岡県宮若市沼口字汐井掛	汐井掛	D115号土壇墓	後期末	頭位部の右側から斜め部並んだ状態。勾玉が前面の中心で管玉、水晶玉が交互に連なる。	10	有稜Ⅱ	長さ6.8～8.5cm、最大幅4.3～6.2cm、孔径0.4mm～2.2mm。透明度が高い。片面穿孔。	ヒスイ異形勾玉1、碧玉管玉10	福岡県教委1980
福岡県京都郡みやこ町徳永	徳永川ノ上	I-8号木蓋 (?)土壇墓	後期後半 ～終末期	右耳飾としてガラス小玉16、ガラス葉玉43、水晶丸玉1	1	無稜Ⅲ	長さ6.0mm、径7.1mm、孔径1.2mm。両側を平坦に研磨。片面穿孔。	ヒスイ勾玉、碧玉管玉、ガラス小玉	福岡県教委1996
福岡県築上郡上毛町大字下唐原	穴ヶ葉山	11号墓 石蓋土壇	後期後半 ～終末期		1	有稜Ⅱ			大平村教委1993
大分県大分市浜	浜	2号石棺墓	後期後半 ～終末		1	有稜Ⅲ			大分県教委1980
岡山県浅口市鴨方(旧:鴨方町)	和田	B区1号土壇	後期	床面から勾玉3、管玉7、水晶玉3、ガラス小玉26が一連状態で出土	3	有稜Ⅰb 有稜Ⅱ	内1点 は 長さ8.1mm、径8.0mm、孔径1.0mm。その他2点は長さ8.0、8.6mm、径6.1、6.5mm、孔径0.8、1.1mm。両面穿孔	ヒスイ勾玉3、 碧玉管玉7、 ガラス小玉26	岡山県教委1981
岡山県倉敷市西尾	辻山田	10号土壇	後期		3	有稜Ⅱ	完形2、小断片1出土。長さ8mm、径6mm。片面穿孔。	ヒスイ勾玉4、 碧玉管玉7、 ガラス小玉11	倉敷市教委1974 (倉敷考古館所蔵)
香川県高松市太田上町	太田原高州	主体部2-1 木棺	後期前葉	水晶玉7のみでの出土	7	有稜Ⅲ	長さ4.46～5.84mm、径6.35～7.16mm。中央に鈍い稜線。透明度が高い。片面穿孔。		香川県教委2015
京都府京丹後市大宮町三坂(旧:大宮町)	三坂神社	3号台状墓 木棺	後期前半	水晶玉8 + ガラス小玉10 + 水晶玉8 + ガラス小玉が頭頂部付近に一連して出土	16	有稜Ⅰb 有稜Ⅲ	長さ3.8mm～5.7mm、径5.0～6.1mm、孔径0.9～1.5mm。中央に鈍い稜。透明度は低い。片面穿孔。	ガラス勾玉1、 ガラス小玉10	大宮町教委1999

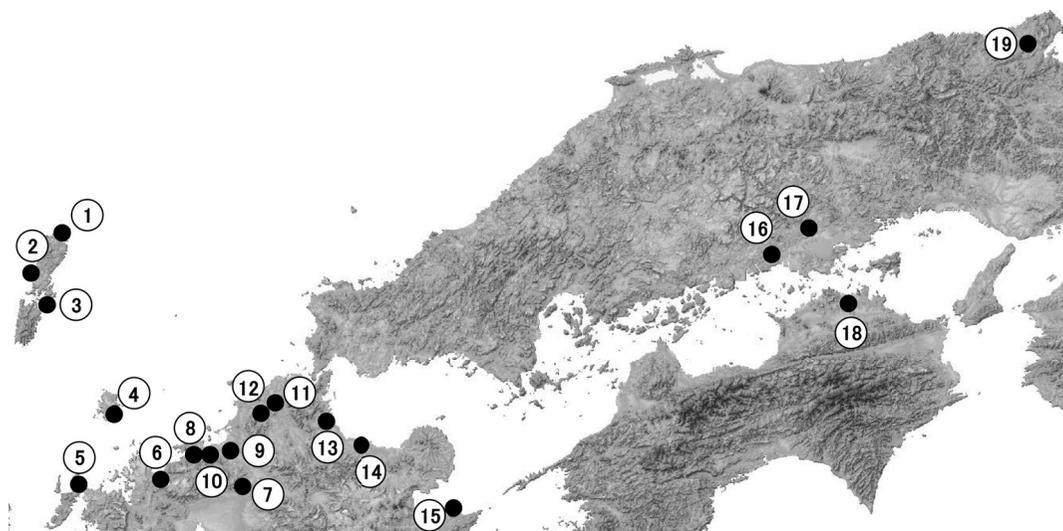


図1. 弥生時代西日本における副葬水晶製玉類出土遺跡の分布（番号は表1に対応）

現時点での弥生時代水晶製玉類の副葬が確認された遺跡は、長崎県対馬で3遺跡3点、壱岐で1遺跡1点、平戸島北部で1遺跡1点、唐津平野で1遺跡1点、糸島平野で1遺跡4点、早良平野・福岡平野で2遺跡23点、遠賀川西岸地域で2遺跡11点、佐賀平野で1遺跡2点、周防灘沿岸地域で3遺跡3点、瀬戸内海地域の今治平野で1遺跡2点、水島灘北岸・南岸で3遺跡13点、京都府京丹後市の竹野川流域で1遺跡16点となる。

出土点数を見ると、1遺構で1点のみ出土する事例が最も多く8例確認できる。複数点出土しているのは、2点4遺跡、3点2遺跡いずれも岡山、4点2遺跡（かがり松鼻、三雲八龍）は北部九州、5点以上の事例は、太田原高州で水晶製玉類でのみ構成された7点、汐井掛9点、三坂神社3号台状墓16点、日佐原E群15号石蓋土壙21点となっている。

図1のとおり、対馬・壱岐を含む北部九州での分布が中心となるが、中でも玄界灘沿岸ならびに周防灘沿岸に沿って分布していることが指摘できる。次に密集分布とは言えないが、瀬戸内沿岸地域でのグルーピングが可能であろう。

以上のことから特定の地域に密集して分布しているとは言えないが、大きく3つの分布域に分けることができる。ひとつは対馬から壱岐そして、長崎県平戸から福岡県鞍手町・宮若市にいたる遠賀川西岸を含む玄界灘沿岸地域、2つめは瀬戸内海地域、3つめは京丹後市を中心とする日本海沿岸地域になる。ここでは遺跡の数は少ないものの、1遺跡での出土数の多さは特徴的である。

## （2）出土墳墓遺構の様相について

次に、出土した墳墓型式について整理してみる。弥生時代の西日本では石棺墓、甕棺墓、（木蓋・石蓋）土壙墓、木棺墓からの副葬が確認されている。

石棺墓では5遺構で8点の副葬が確認されているが、その大部分は対馬を中心とする長崎県にあり、当該地域の弥生時代の主墓制が石棺墓であること（大庭2000）を反映しているものと考え

えられる。

甕棺墓では3遺構で4点の副葬が確認され、壱岐・唐津・鳥栖といずれも北部九州の大型専用甕棺墓制の盛行地にあり、1遺構から1～2点という少数の算盤玉が出土している。

土壙墓には木蓋の存在が想定される徳永川ノ上と石蓋が確認された日佐原と穴ヶ葉山も含めると、9遺構で46点の副葬が確認される。土壙墓自体が強い地域性を見せる墓制ではないが、糸島平野を東限にして瀬戸内沿岸の水島灘北岸まで他墓制に比して広い範囲で見られる。また、福岡平野を中心とする地域で1遺構から9点以上の水晶製玉類が副葬された事例があるため、遺構の数だけでなく出土点数も最多となる。

木棺墓では3遺構で25点の副葬が確認される。他の墓制とは異なり、一定した分布範囲を見せず、早良平野、高松平野、丹後半島と各々出土地域に距離の隔たりが大きい。なかでも吉武樋渡遺跡の木棺墓は、中期中葉から末にかけての甕棺が主をなす墳丘墓内に構築されたものであり、水晶製玉類自体は算盤玉型が2点と少ないが、鉄剣1振、碧玉製管玉16点、ガラス製小玉9点と共存している(福岡市教育委員会1996)。太田原高州遺跡主体部2-1出土のものは7点あるが、その出土状態から水晶製玉類でのみ構成された装身具であると想定され、他の材質の玉類とセットにあるものが多いなか特異である。そして、三坂神社墳墓群3号台状墓出土品も、この墳墓遺跡自体が地域の首長墓を含む家族墓であり(大宮町教育委員会1998)、他の例では見られないガラス勾玉と共存している。

以上のように、弥生時代西日本の副葬水晶製玉類は、特定墓制と結びついて副葬されたというよりは、従来から存在した在地墓制の中に、新たな副葬風習あるいは装身具部材として採り入れられたことが想定される。この点については、他の玉類とのセット関係を考慮し後述することにしよう。

### 3. 弥生時代西日本における副葬水晶玉の分類と変遷

弥生時代の水晶製玉類に対する型式分類については、墳墓出土水晶製玉類全体を見渡した場合、載頭円錐形や角錐体、丸形という玉の形態の特徴上<sup>1</sup>、型式分類の要素は多くなく、これまで法量(大型・小型)、穿孔道具の差異(石針・鉄針)などが要素として取り上げられてきた(河村2010、米田2009<sup>2</sup>、大賀2011<sup>3</sup>)。

これらの要素のうち、外形上の特徴として縦長か横長かという形態差が地域差として表出していることは早くから河村によって指摘され(河村1992)、2010年の分類でも踏襲されている。そこではいわゆる小玉(河村分類Ⅱ型式)について、「長さ7～8mmで中央径が5～6mmの縦長」と「長さ5～6mm未満で中央径とほぼ同じかやや横長」に細分しており、「中央の稜が明瞭でない小さい丸玉状のものがあり、別途区分も必要である」とした(河村2010)。

また、大賀克彦は水晶製玉類のうち数量の多い算盤玉について法量をグラフ化し、穿孔道具・穿孔方向を加味して、A類(直径と高さがほぼ同一で、直径が5～6mm程度、石針によって片面穿孔)、B類(直径と高さがほぼ同一で、直径が5～6mm程度、鉄針によって片面穿孔)、C類(直径よりも高さが大きく縦長な形状を呈し、直径が5～7mm程度、鉄針によって片面穿孔)に分類した(大賀2011)。

上記の両者に共通する分類要素として外形、法量が挙げられる。本稿でもその有効性を認識して分類基準とすることにし、さらに河村が2010年の論考で指摘している稜の有無による分類にも注目する。これは水晶製玉類の製作者が完成品として仕上げようとする目標のデザインを反映していたであろう外形上の特徴として、縦長・横長を決定づける法量(高さ・幅の比率)以外にも稜の有無も重要な要素として作用していたと考えられるためであり、これらに着目することで地域性、時期性を反映した分類が可能になると考える。

## (1) 副葬水晶製玉類の分類について

### 1) 稜の有無

水晶製玉類はまず、中央に稜を持つものと稜を持たず丸みを帯びるものに大別でき、それぞれ有稜、無稜と呼ぶ。

### 2) 最大径と高さの比率

次に既存の研究、特に河村が指摘した縦長、横長という外形上の特徴を示すため、水晶製玉類の最大径と高さに着目し、最大径と高さがほぼ同じもの(I：縦横類似)、高さが最大径よりも大きいもの(II：縦長)、最大径が高さよりも大きいもの(III：横長)の3種類に分けた。

最大径と高さがほぼ同じもの(I：縦横類似)は4点あるが、そのうち木坂5号石棺出土品は最大径・高さともに10mmを越えており、他の3点とは大きさが異なる。また、形態も切子玉をなしており、和田遺跡・三坂神社墳墓群出土品がいわゆる算盤玉形を呈するのとは違いを見せており、最大径・高さにおいて10mm以上のものを有稜I a式、10mm以下のものを有稜I b式としておく。

この他に、水晶製玉類の穿孔方法、具体的には石針か鉄針かといった穿孔道具の違い、片面穿孔か両面穿孔かといった穿孔方向も分類の用途としてこれまで取り上げられてきた(米田2009、大賀2009)。

上記のような要素を勘案すると、弥生時代西日本出土の水晶製玉類は有稜I a式、有稜I b式、有稜II式、有稜III式、無稜II式、無稜III式の6型式に分けることができる(図2・図3、表3)。既存の分類との対応関係は表2に示した。本稿で分類したものを従来の研究で呼称

表2. 本稿での型式分類と既存の型式分類の対応関係

河村2010	大賀2011 *算盤玉を対象に分類	平郡・建神2020
I 型式：単品ないし一対をなして使用されたと推定されるエンタシス状をなす大形品		無稜II
II b 型式：長さ5～6mm未満で中央径とほぼ同じかやや横長	A 類：直径と高さがほぼ同一で、直径が5～6mm程度、石針による片面穿孔 B 類：直径と高さがほぼ同一で、直径が5～6mm程度、鉄針による片面穿孔	有稜I b、有稜III、無稜III
II a 型式：長さ7～8mmで中央径が5～6mmの縦長	C 類：直径よりも高さが大きく縦長な形状を呈し、直径が5～7mm程度、鉄針による片面穿孔	有稜I a、有稜II、無稜II

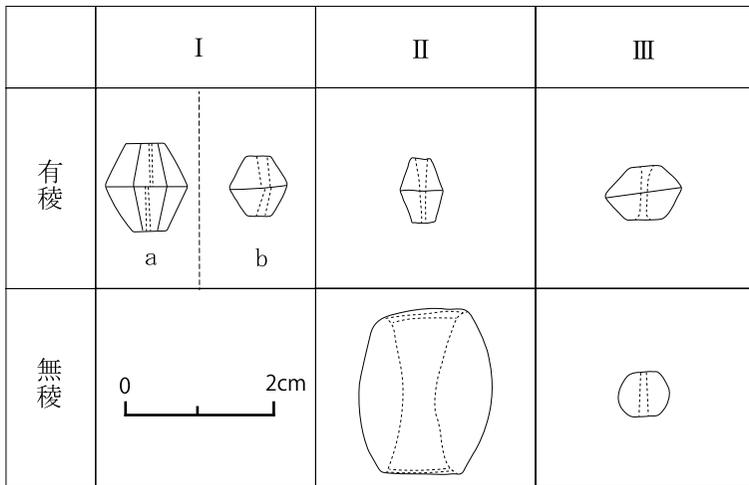


図2. 弥生時代西日本における副葬水晶製玉類型式分類図

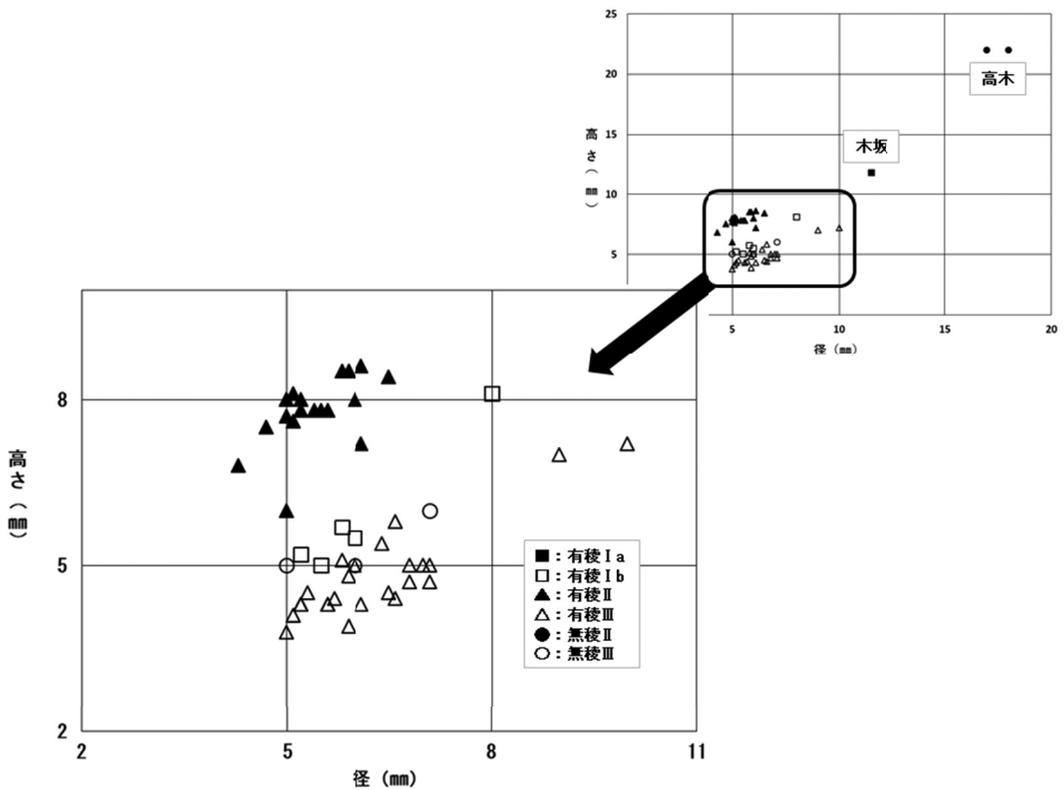


図3. 弥生時代西日本における副葬水晶製玉類各型式の法量分布図

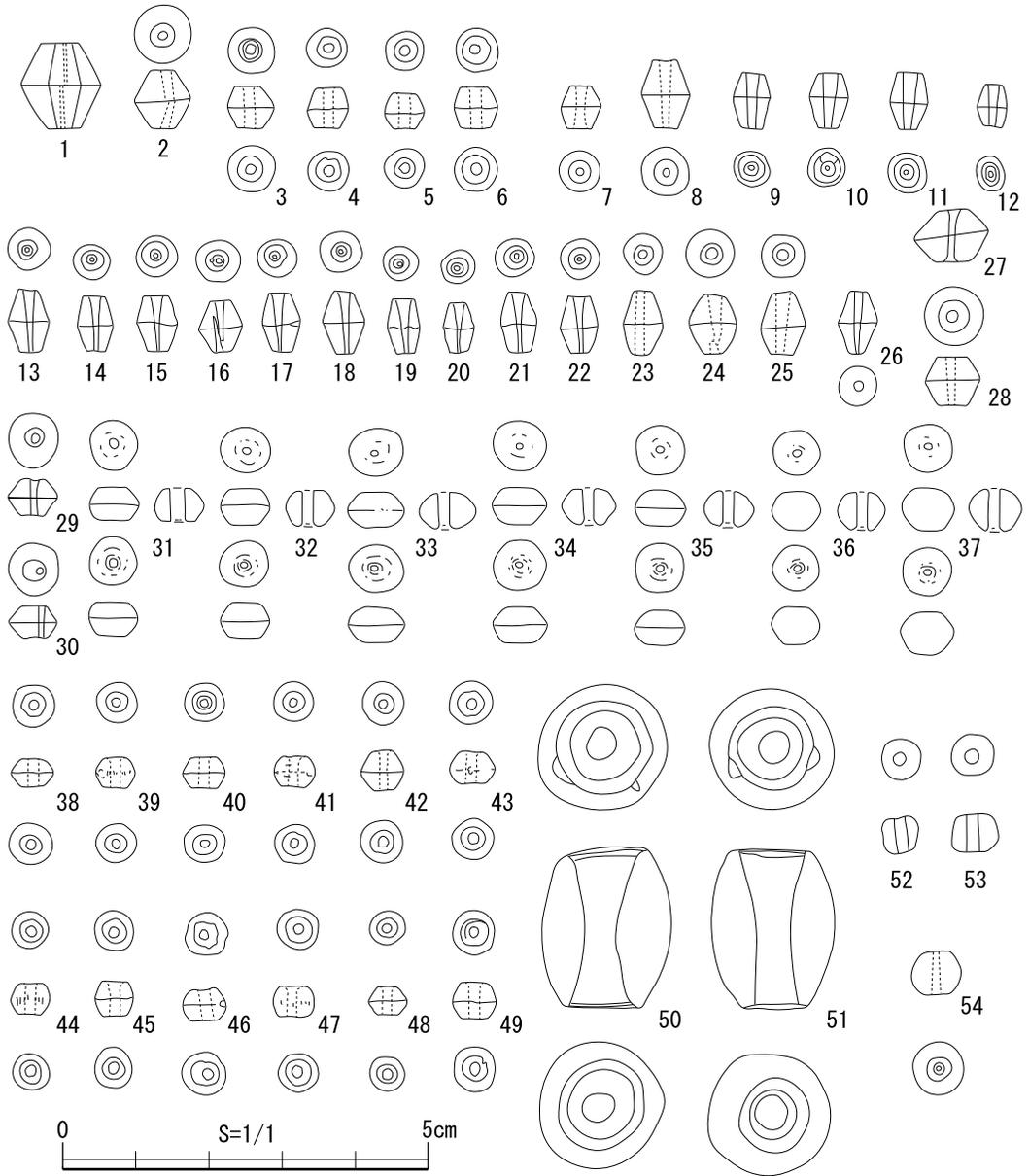
されてきたものと対照させると、有稜 I a 式 = 切子玉、有稜 I b 式 = 算盤玉 (縦横類似)、有稜 II 式 = 算盤玉 (縦長)、有稜 III 式 = 算盤玉 (横長)、無稜 II 式 = 棗玉、無稜 III 式 = 丸玉となる。

弥生時代西日本における副葬水晶製玉類について

表3. 弥生時代西日本における副葬水晶玉の法量と型式

No.	出土遺構	高さ(mm)	径(mm)	型式	穿孔方法	備考
1	木坂5号石棺	11.8	11.5	有稜Ⅰa	鉄、両	切子玉
2	和田B区1号土壙墓1	8.1	8	有稜Ⅰb	鉄?、両	図22-1
3	三坂神社3号墓第10主体部2	5.7	5.8	有稜Ⅰb	片	第31図-2
4	三坂神社3号墓第10主体部9	5.2	5.2	有稜Ⅰb	片	第31図-9
5	三坂神社3号墓第10主体部11	5	5.5	有稜Ⅰb	石、片	第31図-11
6	三坂神社3号墓第10主体部13	5.5	6	有稜Ⅰb	石、片	第31図-13
7	塔の首2号石棺	6	5	有稜Ⅱ		
8	天神ノ元K-1 甕棺	8	5	有稜Ⅱ	鉄、片	fig.52-79
9	三雲八龍土壙墓1	7.7	5	有稜Ⅱ	鉄、片	第133図-17
10	三雲八龍土壙墓2	7.8	5.2	有稜Ⅱ	鉄、片	第133図-18
11	三雲八龍土壙墓3	7.8	5.4	有稜Ⅱ	鉄、片	第133図-19
12	三雲八龍土壙墓4	6	5	有稜Ⅱ	鉄、片	第133図-20
13	汐井掛D115号土壙墓1	8.5	5.9	有稜Ⅱ	鉄、片	fig214-18
14	汐井掛D115号土壙墓2	7.6	5.1	有稜Ⅱ	鉄、片	fig214-19
15	汐井掛D115号土壙墓3	7.8	5.6	有稜Ⅱ	鉄、片	fig214-20
16	汐井掛D115号土壙墓4	7.2	6.1	有稜Ⅱ	鉄、両	fig214-21
17	汐井掛D115号土壙墓5	8	5.2	有稜Ⅱ	鉄、片	fig214-22
18	汐井掛D115号土壙墓6	8.5	5.8	有稜Ⅱ	鉄、片	fig214-23
19	汐井掛D115号土壙墓7	7.5	4.7	有稜Ⅱ	鉄、片	fig214-24
20	汐井掛D115号土壙墓8	6.8	4.3	有稜Ⅱ	鉄、片	fig214-25
21	汐井掛D115号土壙墓9	8.1	5.1	有稜Ⅱ	鉄、片	fig214-26
22	汐井掛D115号土壙墓10	7.8	5.5	有稜Ⅱ	鉄、片	fig214-27
23	穴ヶ葉山11号墓	8	5	有稜Ⅱ	鉄、片	
24	和田B区1号土壙墓2	8.4	6.5	有稜Ⅱ	鉄?、両	図22-2
25	和田B区1号土壙墓3	8.6	6.1	有稜Ⅱ	鉄?、両	図22-3
26	辻山田10号土壙1	8	6	有稜Ⅱ	片	
27	辻山田10号土壙2	8	6	有稜Ⅱ	片	図無し、他に小断片1点あり
28	原ノ辻原ノ久保B区1号甕棺墓	7.2	10	有稜Ⅲ	両	
29	吉武樋渡1号木棺1	5	7	有稜Ⅲ		fig24-18
30	吉武樋渡1号木棺2	4.5	6.5	有稜Ⅲ		fig24-19
31	浜2号石棺墓	7	9	有稜Ⅲ	鉄、片	
32	太田原高洲主体部2-1 1	4.4	6.6	有稜Ⅲ	石、片	図43-284
33	太田原高洲主体部2-1 2	4.7	6.8	有稜Ⅲ	石、片	図43-285
34	太田原高洲主体部2-1 3	4.7	7.1	有稜Ⅲ	石、片	図43-286
35	太田原高洲主体部2-1 4	5	7.1	有稜Ⅲ	石、片	図43-287
36	太田原高洲主体部2-1 5	5	6.8	有稜Ⅲ	石、片	図43-288
37	太田原高洲主体部2-1 6	5.4	6.4	有稜Ⅲ	石、片	図43-289
38	太田原高洲主体部2-1 7	5.8	6.6	有稜Ⅲ	石、片	図43-290
39	三坂神社3号墓第10主体部1	3.9	5.9	有稜Ⅲ	石、片	第31図-1
40	三坂神社3号墓第10主体部3	4.3	5.2	有稜Ⅲ	石、片	第31図-3
41	三坂神社3号墓第10主体部4	4.3	5.6	有稜Ⅲ	石、片	第31図-4
42	三坂神社3号墓第10主体部5	4.4	5.7	有稜Ⅲ	石、片	第31図-5
43	三坂神社3号墓第10主体部6	5.1	5.8	有稜Ⅲ	石、片	第31図-6
44	三坂神社3号墓第10主体部7	4.3	6.1	有稜Ⅲ	石、片	第31図-7
45	三坂神社3号墓第10主体部8	4.3	5.2	有稜Ⅲ	石、片	第31図-8
46	三坂神社3号墓第10主体部10	4.5	5.3	有稜Ⅲ	石、片	第31図-10
47	三坂神社3号墓第10主体部12	4.1	5.1	有稜Ⅲ	石、片	第31図-12
48	三坂神社3号墓第10主体部14	4.3	5.6	有稜Ⅲ	石、片	第31図-14
49	三坂神社3号墓第10主体部15	3.8	5	有稜Ⅲ	石、片	第31図-15
50	三坂神社3号墓第10主体部16	4.8	5.9	有稜Ⅲ	石、片	第31図-16
51	高木D7号土壙墓1	22	18	無稜Ⅱ	石針?、両	甕玉
52	高木D7号土壙墓2	22	17	無稜Ⅱ	石針?、両	甕玉
53	内畑SJ07甕棺墓1	5	5	無稜Ⅲ	鉄、片	図6-6-1
54	内畑SJ07甕棺墓2	5	6	無稜Ⅲ	鉄、片	図6-6-2
55	徳永川ノ上8号土壙	6	7.1	無稜Ⅲ	鉄、片	丸玉

石=石針、鉄=鉄針、両=両面穿孔、片=片面穿孔



【有稜Ⅰa】1：木坂、【有稜Ⅰb】2：和田、3～6：三坂神社、【有稜Ⅱ】7：塔ノ首、8：天神ノ元、9～12三雲、13～22：汐井掛、23：穴ヶ葉山、24・25：和田、26：辻山田、【有稜Ⅲ】27原の辻、28：浜、29・30：吉武樋渡、31～37：太田原高州、38～49：三坂神社、【無稜Ⅱ】50・51：高木、【無稜Ⅲ】52・53：内畑、54：徳永川ノ上

図4. 弥生時代西日本における副葬水晶製玉類

## (2) 各型式の時期と分布

では、次に各型式の時期と分布について見てみよう。

有稜Ⅰa式は木坂遺跡5号石棺の棺内で共伴した青銅器と棺外の土器から後期後半から終末期の副葬時期が想定できる(坂田1976)。現時点でこの遺構から出土した1点だけであり分布圏をなすものではなく、対馬でのみ見られる。

有稜Ⅰb式は2遺跡5点あり、和田遺跡では共伴した土器・特殊器台から後期後半～終末期(岡山県教育委員会1981)、三坂神社墳墓群出土品は共伴鉄器等から後期前半(大宮町教育委員会1998)に副葬時期が想定できる。分布は中国地域にあると言えるが、より具体的には瀬戸内海水島灘北岸と北近畿の竹野川流域となり、密集を見せるわけではない。

有稜Ⅱ式は7遺跡21点ある。そのうち、対馬市塔ノ首遺跡2号石棺出土品は棺内で共伴した瓦質土器から後期前半(長崎県教育委員会1974)、唐津市天神ノ元遺跡K-1甕棺墓出土品が甕棺および墳墓群全体の時期から後期前半と考えられ、この2遺跡が時的には他の資料より先立つ。その後の後期後半から終末期の資料として糸島市三雲遺跡八龍Ⅰ-18地区1・2号土壙墓、宮若市汐井掛遺跡D115号土壙墓、上毛町穴ヶ葉山遺跡、岡山県浅口市和田遺跡B区1号土壙墓、倉敷市辻山田遺跡10号土壙墓出土品があり、これらは鉄針による穿孔が施されている。分布は北部九州、具体的には対馬から玄界灘沿岸、周防灘沿岸地域にいたる比較的広い範囲と瀬戸内海水島灘北岸と大きく2つの地域に分けることができる。

有稜Ⅲ式は5遺跡23点あり、上記の有稜Ⅱ式と共に算盤玉と呼ばれるものである。出土点数も最も多い。時期については福岡市吉武樋渡遺跡1号木棺墓が中期後半頃に比定でき(福岡市教育委員会1996)、その後、後期前半に該当する香川県太田原高州遺跡、京丹後市三坂神社3号台状墓、後期後半から終末期に比定される原の辻遺跡原の久保B区1号甕棺、大分市浜遺跡2号石棺墓がある。分布は北部九州、具体的には壱岐から玄界灘沿岸、周防灘沿岸地域にいたる比較的広い範囲と、点在するものの瀬戸内海水島灘北岸と日本海沿岸地域を含む範囲が見られる。北部九州を中心とする分布範囲と瀬戸内海沿岸と日本海沿岸を中心とする中四国地域とに大きく分けることができる点は、さきほど見た有稜Ⅱ式の分布範囲と類似している。中四国地域の2遺跡では、1遺構あたりの出土数が7点から16点と北部九州での1遺跡での出土数に比べ圧倒的に多いことが特徴となる。

無稜Ⅱ式は棗玉と呼ばれるものであり、現時点では福岡県高木遺跡D7号土壙墓出土の2点のみである。まだ実見はできていないが図面や既存の論考で記されているとおり、両側穿孔であり孔が大きい。遺構の時期は中期中葉で日本列島出土水晶製玉類としては最初の製品となる(福岡県教育委員会1977)。類例は日本列島には無く、平壤貞柏洞206号墓のガラス製棗玉と報告された資料との類似性から、「日本列島では最初に透明ガラスを水晶で模倣した可能性も考えうる」という見解(中村2015)や、「穿孔方法が縄文の大珠と共通することから硬質の玉素材に対応して伝統的な技法によって対応」した(河野2006)という指摘もある。この資料も1遺跡での2点のみ確認されるもので分布圏をなさず、北部九州玄界灘沿岸地域に散発的に存在する。

無稜Ⅲ式は丸玉とも呼ばれるもので3遺跡5点確認されており、鳥栖市内畑SJ07甕棺墓は

甕棺自体の型式から後期前半、みやこ町徳永川ノ上遺跡8号土壙墓は共伴した漢鏡と当該遺構が含まれる墳墓群の年代から終末期(福岡県教育委員会1996)に該当し、後期前葉から終末期まで副葬された。遺跡数や出土点数は少ないが佐賀平野と周防灘沿岸地域で見られる。

### (3) 副葬水晶製玉類の変遷(表4)

弥生時代の西日本において副葬水晶製玉類は、弥生時代中期中葉以降終末期まで出土する。現時点において日本列島最初の副葬水晶玉となる福岡県高木遺跡D7号土壙墓出土品の時期は中期中葉であるが、無稜Ⅱ式は持続的に製作・副葬されなかった。中期後葉でも吉武樋渡遺跡1号木棺から有稜Ⅲ式2点が出土しているのみで活発な副葬行為は見いだしがたい。これら中期段階の水晶製玉類の副葬は北部九州、特に早良・福岡平野でのみ確認される(図5上段)。

西日本における水晶製玉類の副葬は、出土遺跡数、出土点数ともに後期に入ると本格的に行われる。後期の中でも前半と後半で副葬水晶製玉類の出土様相は違いを見せる。

後期前半には前時期より副葬される型式が増加し、有稜Ⅰb、有稜Ⅱ、有稜Ⅲ、無稜Ⅲ式が見られる。出土地域を見ると、有稜Ⅰb式は瀬戸内海水島灘北岸・日本海沿岸、有稜Ⅱ式は対馬・唐津平野、有稜Ⅲ式は瀬戸内海水島灘南岸・日本海沿岸の2遺跡で21点と同時期の他の型式に比べ大量に副葬されていることは特筆される。無稜Ⅲ式は佐賀平野での出土である。この時期に主をなすのは中四国地域における有稜Ⅲ式となる<sup>4</sup>(図5中段)。

後期後半から終末期になると、後期前半の型式の組み合わせに有稜Ⅰa式が加わり、対馬の木坂5号石棺で現在一点のみ確認されている。この時期には有稜Ⅱ式が19点と他型式に比べ多数を占めるようになる。特に、玄界灘沿岸地域の2遺跡で14点が副葬されており、この地域が水晶製玉類副葬の中心地域となり、周防灘沿岸地域と瀬戸内海地域水島灘北岸では散発的に出土している<sup>5</sup>。後期前半に主流であった有稜Ⅲ式は壱岐と周防灘沿岸で少数副葬されるだけとなる。有稜Ⅰbは瀬戸内海地域水島灘北岸、無稜Ⅲ式は周防灘沿岸地域で散発的に少数見られる(図5下段)。

河村好光は汐井掛D115号墓出土品のような縦長の小型算盤玉、つまり本稿での有稜Ⅱ式の分布について、「北部九州」から「瀬戸内におよび、兵庫県赤穂郡上郡町西野山古墳など成立

表4. 弥生時代西日本における副葬水晶製玉類の消長

	有稜Ⅰa	有稜Ⅰb	有稜Ⅱ	有稜Ⅲ	無稜Ⅱ	無稜Ⅲ
弥生中期中葉					2	
中期後葉				2		
後期前半		2	2	21		2
後期後半						
後期終末期 (=庄内式併行期)	1	1	19	2		1
出土点数	1	3	21	25	2	3

\* 色付枠内の数字は各時期の出土点数

弥生時代西日本における副葬水晶製玉類について

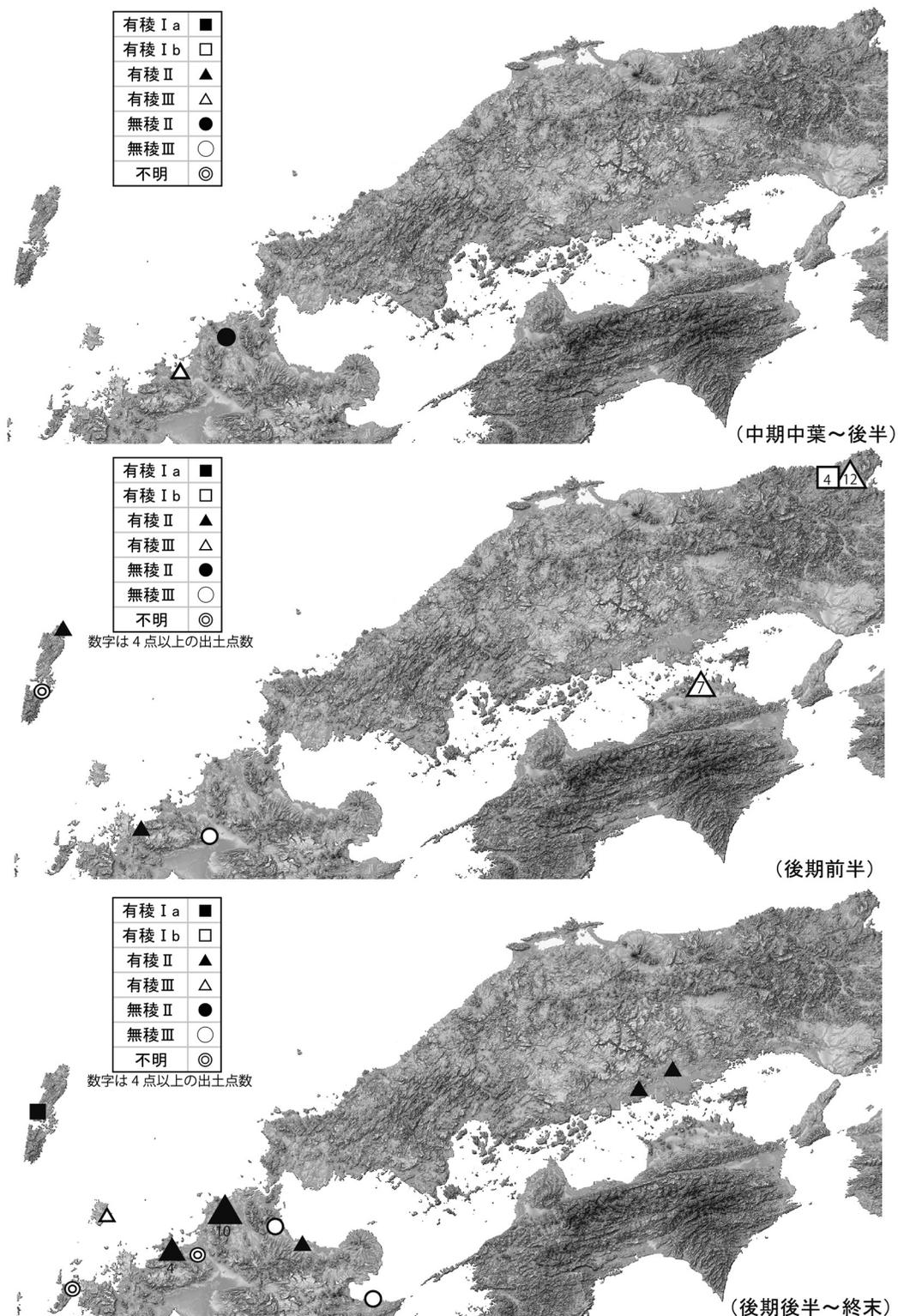


図5. 弥生時代西日本における副葬水晶製玉類の時期別出土状況

期古墳から若干出土するものの、やがてこの型式は途絶えてしまう」とし、縦長のものが北部九州から瀬戸内に分布し、横長のものが平所遺跡では主流をなす点を指摘している(河村1992)。河村が指摘した点を踏まえて墳墓副葬水晶製玉類の型式別分布を見ると、その中心地の存在から有稜Ⅲ式は「中四国タイプ」、有稜Ⅱ式は「北部九州タイプ」とも言えるような地域性を見せることが分かる。このことは地域差だけでなく、時間差も示しており、これら墳墓に副葬された水晶製玉類の主要製作地が中期後半以来の北近畿(奈具岡遺跡)や山陰(青谷上寺地遺跡、西高江遺跡、久蔵峰北遺跡、平所遺跡)から、後期後半には北部九州へ移った可能性を示すのではないかと考える。

大賀克彦は奈具岡遺跡第7・8次調査区出土の水晶製算盤形玉が、自身がグルーピングした「第1のグループ」つまり、「石針によって片面穿孔され」「直径が4.5~6.5mmで、直径 $\geq$ 高さとなる」もの、本稿での有稜Ⅱ式であることから、それらが奈具岡遺跡での製作品である可能性が極めて高いとして指摘している(大賀2009)。

#### 4. 弥生時代西日本における水晶製玉類の副葬様相

前述した内容を基に、墳墓における出土状態を整理・分析し、水晶製玉類の副葬風習について調べてみよう。

##### (1) 水晶製玉類の副葬様相

出土状況から以下のような4つの様相が見られる。

##### 第1様相：小型品の連珠(図6)

水晶製玉、共伴玉類が全て小形品でそれらが連なっている状態で出土するものである。頭飾もしくは耳飾と想定される事例として、三坂神社墳墓群3号墓第10主体部、徳永川ノ上遺跡8号土壙のように頭部の右寄りに出土するものと、頭部の左寄りに出土する汐井掛D115号土壙墓出土品がある。

和田遺跡B区1号土壙では玉類の正確な出土地点不明であるものの縦約15cm、横約20cmの範囲から玉類が出土している。有稜Ⅱ式的水晶製玉3点と翡翠製勾玉2点と碧玉製管玉3点が連なって出土しており、これらがセットで1つの装身具をなしていたものと思われる。

時期は後期前半から後期終末期にかけて見られ、北部九州から瀬戸内海沿岸、日本海沿岸地域で確認される。

##### 第2様相：大形品を中心とした連珠(図7)

大形的水晶玉を中心として他の小形の玉類が連なるものである。1例しか確認されていないが、高木遺跡D7号土壙墓の事例がこれに該当する。水晶玉2点を中心として管玉、ガラス小玉が連なって出土している。河村が指摘するように「2本の紐を束ねる締りめ、一連の節をなす飾り玉など」の機能が考えられる(河村2010)。時期は中期中葉となる。

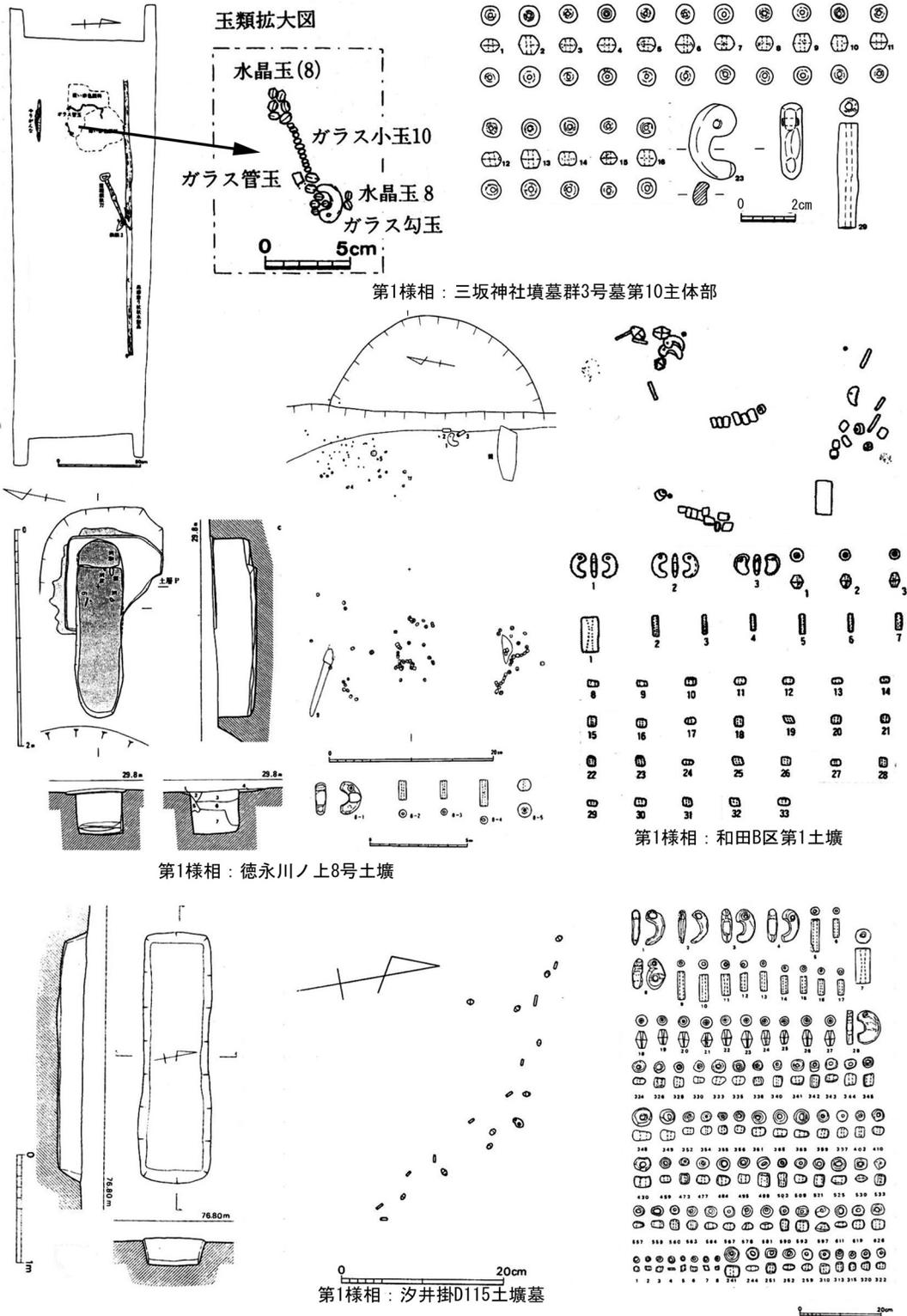
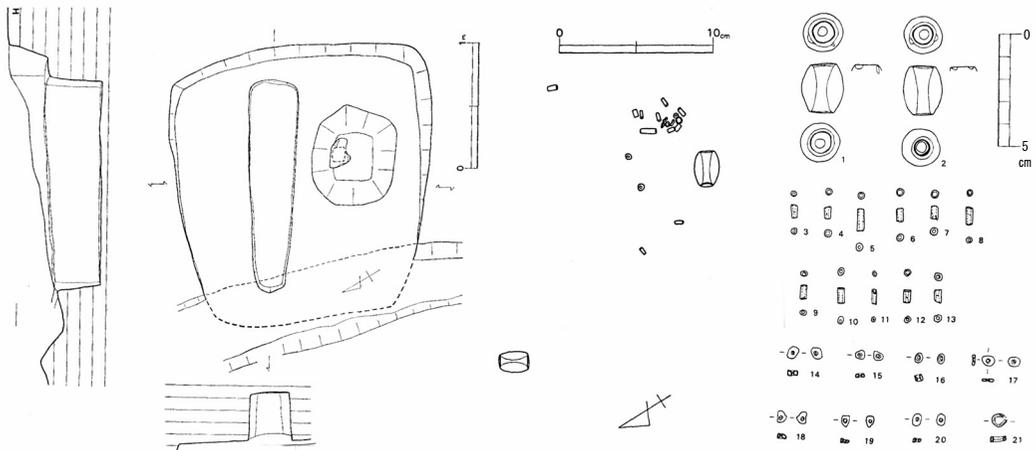
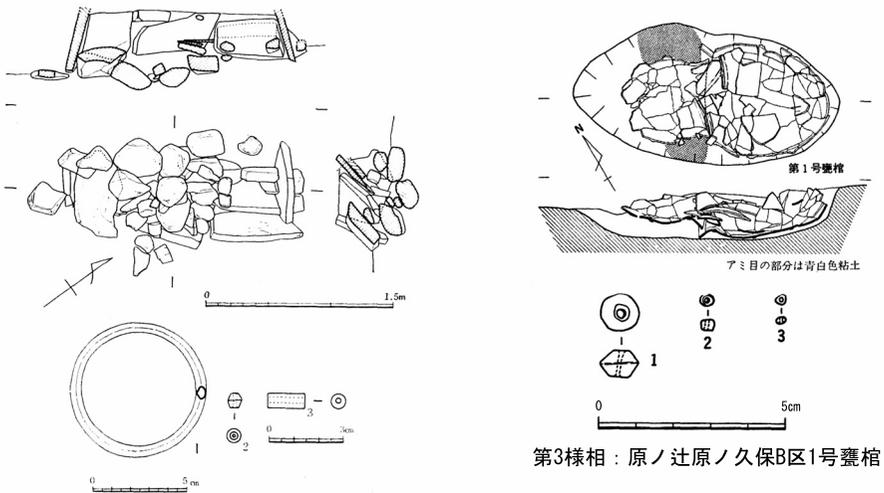


図6. 弥生時代西日本における水晶製玉類の副葬様相①

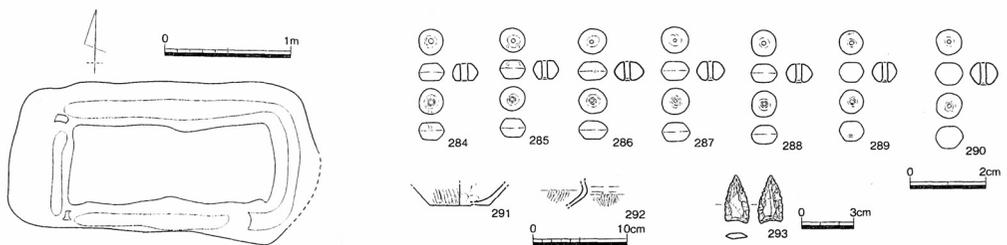


第2様相：高木D7土墳墓



第3様相：原ノ辻原ノ久保B区1号甕棺

第3様相：塔ノ首2号石棺



第4様相：太田原高州主体部2-1

図7. 弥生時代西日本における水晶製玉類の副葬様相②

### 第3 様相：多数の玉類が散乱(図7)

連なって出土せず、多数の玉類が散乱している状態で石棺と甕棺墓に認められる。塔ノ首遺跡2号石棺では有稜Ⅱ式1点、管玉1点、ガラス製小玉およそ1400点が棺内で出土している。原ノ辻遺跡原ノ久保B区1号甕棺では、有稜Ⅲ式1点が下甕のほぼ中央、多数のガラス玉が下甕の各所に散乱して出土している。後期前半から後期終末期の時期に、現時点では壱岐・対馬で見られる。

### 第4 様相：水晶のみの連珠(図7)

事例としては香川県太田原高州遺跡主体部2-1が挙げられる。有稜Ⅲ式7点は埋葬主体部内の北東部側から出土したと報告されている(香川県教育委員会2014)。どの程度長壁側や短壁側や近接しているのかは不明であるが、7点を接続しても3.5cm程度の長さにしかならないため、腕輪のような用途は想定し難い。上半身の装飾品と考え、頭部装飾品の垂飾もしくは耳飾の可能性も排除できない。水晶玉のみの副葬で共伴玉類が無い稀な事例といえる。時期は後期前半になる。これも現時点では瀬戸内海水島灘南岸のみ見られる。

副葬状態が良好に残る事例が少ないため類型化できるほどのデータは蓄積されていないが、副葬行為について以上のような4つの様相が見られる。弥生時代の水晶製玉類のほとんどが1cm程度の製品のため、主に頭飾か耳飾の部材として使われ、水晶製玉類そのものが勾玉のような装身具の主要部材として使われていたようには見えない。そういった意味では、香川県太田原高州遺跡の事例は、水晶製玉類のみで構成された装身具をなしていたことは特徴的である。小形品の連珠と大形品を中心とした連珠の違いは、小形品の連珠は主に頭頂部付近で出土し、大形品を中心とした連珠は主に埋葬主体部上半部中央で出土する点である。つまり、小形品の連珠は首飾の部材としての使用よりも頭飾、耳飾の部材として用いられたと考えられる。

## (2) 水晶製玉類と共伴する他材質の玉類について(表5)

高橋進一は吉備地域の玉作遺跡と玉製品について弥生時代から奈良・平安時代まで通時的にまとめるなかで、副葬玉類のセット関係についても言及している。弥生時代の水晶製玉に関しては、和田遺跡B-1号土壙墓、辻山田遺跡土壙墓10出土品において「硬玉小勾玉・水晶形算盤玉状品・小形管玉・太形管玉・ガラス小玉」というセット関係の存在を指摘している(高橋1992)。

弥生時代西日本における副葬水晶製玉類と共伴関係にある他材質の玉類のセット関係を表5に示した。

水晶製玉類とセット関係にあるのは翡翠製勾玉、ガラス製勾玉、碧玉製管玉、ガラス製小玉である。中期段階には事例が少ないものの、中期中葉には水晶製玉類+碧玉製管玉+ガラス製小玉(高木遺跡)、中期後葉には水晶製玉類+翡翠製勾玉+碧玉製管玉+ガラス小玉(吉武樋渡遺跡)のセット関係が見られる。

後期前半は、ガラス製小玉の共伴事例が多く見られる傾向になり、北部九州ではこれに碧玉

表5. 弥生時代西日本における副葬水晶製玉類と共伴する他材質玉類

所在地	遺跡・遺構	時期	副葬様相	型式	翡翠 勾玉	ガラス 勾玉	碧玉 管玉	ガラス 管玉	ガラス 小玉	備考
福岡県鞍手町	高木D7号土壙墓	中期中葉	第2様相	無稜Ⅱ			11		8	
佐賀県唐津市	天神ノ元遺跡	中期後半	?	有稜Ⅱ			1			
長崎県対馬市	塔の首2号石棺	後期前半 ～中頃	第3様相	有稜Ⅱ			1		1400	
長崎県対馬市	かがり松鼻石棺	後期前半 ～中頃	第3様相	?					1200	
佐賀県鳥栖市	内畑SJ07甕棺墓	後期前半 ～中頃	第1様相	無稜Ⅲ					16	共伴：鉄刀子
香川県高松市	太田原高洲主体部2-1	後期前葉	第4様相	有稜Ⅲ						
京都府京丹後市	三坂神社3号墓 第10主体部	後期前半	第1様相	有稜Ⅰb 有稜Ⅲ		1		14	10	共伴：素環頭鉄 刀、鉄鏃、鉄鉞
福岡県福岡市	吉武樋渡1号木棺	後期	第1様相	有稜Ⅲ			12		36	共伴：鉄剣
長崎県対馬市	木坂5号石棺	後期後半 ～終末期	第1様相	有稜Ⅰa					20	共伴：鉄刀子
長崎県壱岐市	原ノ辻原ノ久保B区 1号甕棺	後期後半 ～終末期	第3様相	有稜Ⅲ					2	
福岡県上毛町	穴ヶ葉山11号墓	後期後半 ～終末期	第1様相	有稜Ⅱ			4		3	共伴：鉄刀子
福岡県鞍手町	汐井掛D115号土壙墓	後期終末期	第1様相	有稜Ⅱ	1		9			
福岡県糸島市	三雲八龍Ⅰ-18地区 1・2号土壙墓	後期後半 ～終末期	第1様相	有稜Ⅱ	1		7		8	
福岡県春日市	日佐原E群15号土壙墓	後期後半 ～終末期	第1様相	?	2		14			
福岡県みやこ町	徳永川ノ上8号土壙墓	後期後半 ～終末期	第1様相	無稜Ⅲ	1		3		131	共伴：鉄刀子
大分県大分市	浜2号石棺墓	後期後半 ～終末期	第1様相	有稜Ⅲ	2		31		285+20	
岡山県浅口市	和田B区1号土壙墓	後期後半 ～終末期	第1様相	有稜Ⅰb 有稜Ⅱ	3		7		26	
岡山県倉敷市	辻山田10号土壙墓	後期後半 ～終末期	第1様相	有稜Ⅱ	4		8		80以上	

\*玉類の数字は出土点数

製管玉が加わる。第3様相のうち大量のガラス小玉副葬の風習は、対馬でのみ見られる地域的特徴を有するものとなる。塔ノ首2号石棺では棺内から銅釧や瓦質土器も共伴し、かがり松鼻では変形細形銅剣、銅製剣把飾1点が共伴するなど、他地域とは副葬品の内容においても違いが見られる。この時点で九州以東では第1様相と第4様相が見られるが、北部九州では第1様相が主をなし、共通した副葬様相は日本海側の三坂神社墳墓群3号墓第10主体でも確認される。

後期後半から終末期にかけては、北部九州、瀬戸内海沿岸の遺跡で水晶製玉類+翡翠製勾玉+碧玉製管玉+ガラス小玉という一定のセット関係を見せるようになる。これらの地域で翡翠製勾玉が新たにセットに加わる点が特徴となる。また、徳永川ノ上遺跡や浜遺跡など周防灘沿岸ではガラス小玉の出土点数が100点を越える点は、汐井掛遺跡、三雲遺跡など玄界灘沿岸地域の様相とは異なり、このようなガラス小玉の多量共伴は和田遺跡や辻山田遺跡など瀬戸内海地域の墳墓でもその影響が見られる。

弥生時代西日本において明確な副葬状況が確認できる事例は20例を越えず限定された資料数ではあるが、その基本的な副葬様相としては第1様相、つまり共伴玉類が全て小形品でそれらがつなげた状態での副葬であるといえよう。第2、第4様相についてはその事例数が少ないた

め「副葬風習」といえるような共通性を時間的空間的に有しているかどうかは現時点では断言することは難しい。第3様相については上述したように対馬に限定されている状況であるが、同時期の韓半島に類例がないかを検討する必要があるが、この点については別途機会を設けたい。

## 5. 弥生時代山陰地域における水晶製玉類の生産と供給

これまで墳墓出土の水晶製玉類について調べてきたが、生産遺跡との関連性についても言及しておこう。弥生時代の水晶製玉類生産を論ずるうえで重要かつ核心的な地域の1つとなるのは島根東部、鳥取を含む山陰東半部にあるといえる。それは山陰地域では副葬品としての水晶製玉類は出土していないものの、水晶製玉類の製作工房址は他地域に比べ多く発見されているためである。特に、鳥取県において弥生時代中期後葉から後期の時期に北栄町西高江遺跡(中期後葉)、鳥取市青谷上寺地遺跡(中期後葉～後期後葉)、東伯町久蔵峰北遺跡(後期後葉)、琴浦町笠見第3遺跡(後期後葉)で水晶製玉類の製作工房と考えられる住居址が調査された(鳥取県埋蔵文化財センター2013)。

ここでは水晶製玉類の製作を想定できる資料と完成品が出土した鳥取市青谷上寺地遺跡の事例について調べ、製作地と消費地(埋葬遺跡)との関係性について考えてみる。

青谷上寺地遺跡ではこれまで水晶製玉類製作の工房跡と推定されるような住居址は発見されていないものの、水晶製玉類の製作を想定させる原石や四角柱状材は確認されている(鳥取県埋蔵文化財センター2013)。完成品としては、県道7区のSA26出土品(図8-588)と県道4区のSX01出土品(図8-587)が知られており、587は本稿での有稜Ⅱ式に、588は無稜Ⅲ式に該当する。これら水晶製玉類の製作資料は集落の中心域に該当する県道5～7区からまとまって出土しており、その時期は弥生時代後期～古墳時代前期初頭にかかる時期以降が主体となるが、四角柱状材等の製作資料の中にも弥生時代中期中葉～後葉に属する資料があるとされる(鳥取県埋蔵文化財センター2013)。また最近、正式報告書が刊行された第17次調査では完成品の水晶製算盤玉21点が出土している(図8-1～21)。第17次調査の地点もやはり集落中心域内に該当するが、ピット・土壇埋土出土の5点以外は包含層からの出土である。その法量は「長さ3.66～4.40mm、径2.94～3.62mm」のグループと「長さ4.52～5.53mm、径3.64～4.68mm」のグループに分けられている(鳥取県2020)。全体的に墳墓出土品と比すると小さい点が特徴といえるが、図8-1～4・9は有稜Ⅲ式、図8-5～8・10～21は有稜Ⅱ式、図8-15・20・587は無稜Ⅱ式、図8-18は有稜1b式、図8-17・588は無稜Ⅲ式に該当し、多様な型式が1遺跡に存在することが指摘できる。また、これらの資料のうち穿孔部内を確認できたものについては石針による穿孔の可能性が高いと判断した<sup>6</sup>。

これら青谷上寺地第17次調査出土品のうち図8-1～4・9と形態的類似を見せるものとして、後期前半の三坂神社墳墓群3号墓第10主体出土品が挙げられる。形態、法量、石針による穿孔という点から最も近い資料となる。青谷上寺地第17次調査出土品の詳細な時期を判定できる材料が乏しいが、上述したように中期中葉～後葉に属する四角柱状材等の製作資料があることから三坂神社墳墓群と併行あるいは先行する時期の水晶製玉類製作も可能であったと考

える。

また、後期前葉の太田原高州主体部2-1出土品(図4-31~37)との類似性も注目される。この資料について報告者は「稜の緩やかな形状、割れ円錐から推測される穿孔方法、サイズ」の共通性から奈具岡技法による製作品と推定している(乗松2014)。形態や水晶の質の類似性は高いといえるが、法量において太田原高州出土品が径6.4~7.1mm、青谷上寺地17次調査出土品が4.6~5.85mmと差が見られる。むしろ、報告者が指摘したように太田原高州遺跡出土品は奈具岡遺跡での生産品である可能性が高い(乗松2014)。

このように、先述した形態的特徴、法量、穿孔方法の類似から三坂神社墳墓群3号墓第10主体出土水晶製玉類は青谷上寺地遺跡で製作されたものである可能性を指摘できる。山陰地域が弥生時代後期後半における水晶製玉類の生産・供給地域であり、青谷上寺地遺跡のような交易

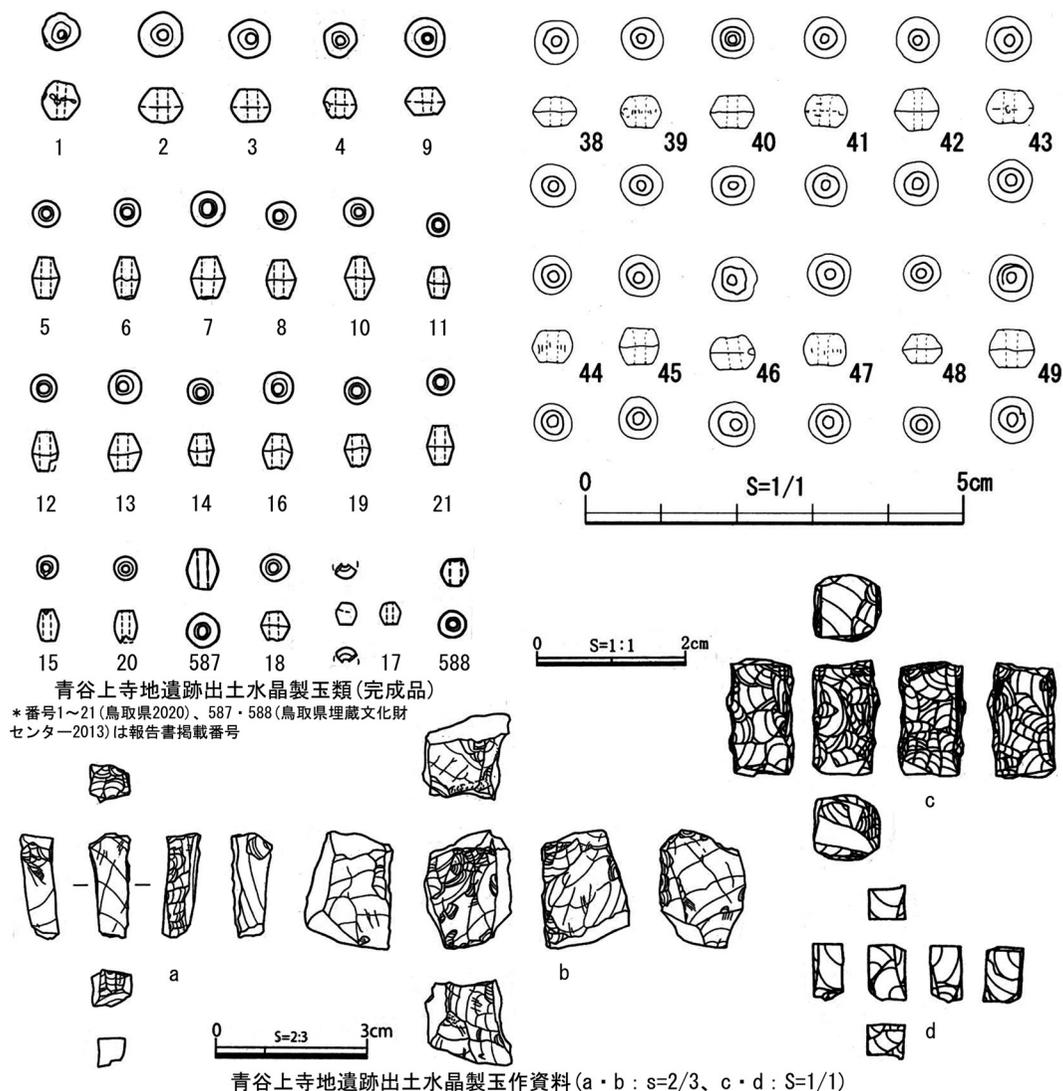


図8. 青谷上寺地遺跡出土水晶製玉・玉作資料と比較資料(三坂神社墳墓群出土品)

を担う拠点集落がそのような役割を担っていたものと考えられる。

この他に、図8-5～8・10～21のような有稜Ⅱ式は、後期末期の穴ヶ葉山遺跡(図4-23)、和田遺跡(図4-24・25)、辻山田遺跡(図4-26)出土品との形態的類似性が見られるが、これらは青谷上寺地遺跡出土品に比べると法量が小さく、鉄針による穿孔が行われているという違いがある。数量的に有稜Ⅱ式が最も多く分布する北部九州で製作されたものが瀬戸内まで及んだものと考えられるが、縦長で稜を有するという形態的なモデルは後期後葉までには山陰地域に存在したのかも知れない。

## まとめ

以上で、弥生時代西日本における副葬水晶製玉類について、関連資料の集成、分類、変遷案提示といった基礎的な作業を通して、水晶製玉類の副葬行為について調べてみた。その内容を整理することで結語としたい。

- ①弥生時代西日本における副葬水晶製玉類は現時点で19遺跡82点が確認される。その分布を見ると、玄界灘沿岸地域、瀬戸内海地域、日本海沿岸地域と大きく3つの区域に分けることができる。水晶製玉類が出土した墳墓の型式をみても特定墓制と結びついて副葬されたとはいえず、従来から存在した在地墓制の中に、新たな副葬風習あるいは装身具部材として採り入れられたことが想定される。
- ②これら副葬水晶製玉類は、稜の有無と最大径・高さの比率によって、有稜Ⅰa式、有稜Ⅰb式、有稜Ⅱ式、有稜Ⅲ式、無稜Ⅱ式、無稜Ⅲ式の6型式に分けることができた。
- ③中期中葉の福岡県高木遺跡D7号土壙墓出土品から始まる西日本の水晶製玉類の副葬は、中期後葉の吉武樋渡遺跡1号木棺出土品を含めても少数で北部九州、特に早良・福岡平野でのみ確認される。西日本における本格的な水晶製玉類の副葬行為は後期に入ると始まる。後期前半には中四国地域において有稜Ⅲ式が多く副葬され、後期後半には副葬の中心地が玄界灘沿岸地域へと移動する。
- ④水晶製玉類の副葬については、その出土状況から第1様相：小型品の連珠、第2様相：大形品を中心とした連珠、第3様相：多数の玉類が散乱、第4様相：水晶のみの連珠という4つの様相を見せることを指摘した。これら副葬水晶製玉類のほとんどが1cm程度の製品である点と出土位置・状況から主に頭飾か耳飾の部材として使われたと考えた。
- ⑤水晶製玉類の副葬と他材質の玉類とのセット関係を見ると、後期前半はガラス製小玉との共伴事例が多く見られる傾向になり、北部九州ではこれに碧玉製管玉が加わる。後期後半から終末期にかけては、北部九州・瀬戸内海沿岸の遺跡で水晶製玉類+翡翠製勾玉+碧玉製管玉+ガラス小玉という一定のセット関係を見せることが分かった。
- ⑥水晶製玉類の生産と供給について鳥取市青谷上寺地遺跡出土品を材料に、形態、法量、穿孔方法の共通性から京丹後市三坂神社墳墓群3号墓第10主体出土品との共通性を指摘し、弥生時代後期前半における水晶製玉類の生産・供給地として山陰地域、特に青谷上寺地遺跡のような交易を担う拠点集落がそのような役割を担っていたと考えた。

以上のように、弥生時代の西日本において副葬水晶製玉類は、弥生時代中期中葉以降終末期まで出土する。水晶製玉類の副葬は古墳時代前期へと続くが、時代の転換期における副葬水晶製玉類に対する検討や製作遺跡との関連性への言及、韓半島原三国時代の水晶玉との比較等も今後の課題として残っている。また、東日本出土の資料については今回扱うことができなかった。別途機会を設けて検討を行う予定である。

謝辞：資料調査や文献収集、論文執筆時にご協力、有益なご助言をいただいた下記の方々へ  
末尾ながら感謝いたします。また、有益なコメント・指摘を頂いた査読者へも感謝いたします。  
会下和宏、岡田晴菜、金武重、小嶋篤、酒井雅代、紫藤芙美、清水房恵、島孝寿、進村真之、  
立谷聡明、谷澤亜里、松本岩雄、長井博志、中川寧、西川徹、牧本哲雄、松尾真里帆、松尾佳  
子、水田貴士、森元純一、濱田竜彦、原藤健一、山口雄治、矢野和昭、楊娥琳、湯村功、吉田  
東明、米田克彦、綿貫俊一（敬称略）

本稿は、島根大学法文学部山陰研究センター山陰研究プロジェクト「既掘考古資料の集成検討  
および一括資料群の再検討による山陰地域社会の動態的研究」（2019～2021年度、代表・平郡  
達哉）による研究成果の一部である。

付記：各章の執筆分担は以下の通りであるが、両名で執筆した章については、相互に文章を持  
ち寄り加筆修正し、最終的に両名で全体を調整した。

はじめに：平郡、1章：平郡・建神、2章：平郡、3章：平郡・建神、4章：建神、5章：平  
郡、まとめ：平郡・建神

## 【参考文献】

### 【論文】

- 会下和宏2001「弥生時代の玉類副葬—西日本～関東を中心にして—」『日本考古学の基礎研究 茨城大学  
考古学研究室20周年記念論集』茨城大学人文学部考古学研究室
- 会下和宏2015「第3節 玉類副葬」『墓制の展開にみる弥生社会』、同成社
- 大賀克彦2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第86巻第4号、日本考古學會
- 大賀克彦2002「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観』第9巻、小学館
- 大賀克彦2005「弥生時代における山陰系玉類の流通」『玉文化』第2号、日本玉文化研究会
- 大賀克彦2009「山陰系玉類の基礎的研究」島根県古代文化センター編『出雲玉作の特質に関する研究—  
古代出雲における玉作の研究Ⅲ—』
- 大賀克彦2011「六 弥生時代における玉類の生産と流通」『講座日本の考古学5 弥生時代(上)』、青木  
書店
- 大賀克彦・望月誠子・戸根比呂子・小山雅人2005「奈具岡遺跡再整理報告(3)」『京都府埋蔵文化財情報』  
第98号
- 大庭孝夫2010「北部九州における縄文晩期～弥生前期の墓制」『弥生時代の墓制(1) —墓制からみた弥生

- 文化の成立一』第48回埋蔵文化財研究集会発表資料・資料集、埋蔵文化財研究会  
鏡山猛・渡辺正気1959「福岡県日佐原の弥生時代墓地」『日本考古学協会第24回総会研究発表要旨』日本考古学協会  
鏡山猛1972「環溝住居址論攷」『九州考古学論攷』  
河合章行編2013b『日本海を行き交う弥生の宝石 青谷上寺遺跡の交流をさぐる』鳥取県埋蔵文化財センター  
河野一隆2000「水晶製玉作と階層性—奈良岡遺跡を中心に—」『季刊考古学・別冊10 丹後の弥生王墓と巨大古墳』雄山閣  
河野一隆2006「水晶製玉類の生産と流通」『季刊考古学』第94号、雄山閣  
河野一隆・野島永2003「弥生時代水晶製玉作りの展開をめぐって」『京都府埋蔵文化財情報』第88号、京都府埋蔵文化財調査研究センター  
河村好光1992「攻玉技術の革新と出雲の玉づくり」『鳥根考古学誌』第9集、鳥根考古学会  
河村好光2010「第2章 玉づくりの定着と文化圏連鎖」『倭の玉器—玉づくりと倭国の時代』、青木書店  
北山峰生2007「北近畿における墳墓出土玉類の検討」『玉文化研究』第4号、日本玉文化研究会  
小林行雄1976「神功・応神紀の時代」『古墳文化論考』平凡社  
坂田邦洋1976『対馬の考古学』縄文文化研究会  
鳥根県教育委員会、古代文化センター2004『古代出雲における玉作の研究Ⅰ—中国地方の玉作観連遺跡集成—』鳥根県古代文化センター調査研究報告書22  
鳥根県教育委員会、古代文化センター2005『古代出雲における玉作の研究Ⅱ—中国地方の玉製品出土遺跡集成—』鳥根県古代文化センター調査研究報告書28  
清水真一1982「鳥取県下の玉作遺跡について—山陰の弥生時代の玉生産の流れ」『考古学研究』28-4、考古学研究会  
高橋進一1992「玉作遺跡と玉製品」『吉備の考古学的研究』（上）、山陽新聞社  
高橋進一2002「水晶製玉類の製作について」『環瀬戸内海の考古学』、古代吉備研究会  
田代弘1993「奈良岡遺跡（第四次）」『京都府遺跡調査概報』第55冊—1、財団法人京都府埋蔵文化財調査センター  
田代弘2004「京都府奈良岡遺跡」寺村光晴編『日本玉作大観』吉川弘文館  
谷澤重里2012「第1節 城野遺跡の玉作」『城野遺跡』北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室  
谷澤重里2019「玉類からみた日韓交渉：弥生時代前期後半～後期の北部九州を中心に」『新・日韓交渉の考古学—弥生時代—第3回共同研究会 発表要旨集』、「新・日韓交渉の考古学—弥生時代—」研究会  
寺村光晴2004『日本玉作大観』吉川弘文館  
中摩浩太郎ほか1986「神宮山1号古墳・3号古墳の測量調査成果報告」『続トレンチ』第6巻第4号、広島大学文学部考古学研究室続トレンチ編集委員会  
中村大介2015「日韓の石製玉類の流通とその変化」『玉の流通にあらわれた東アジアの交渉』国際学術大会  
中村大介2016「環日本海における石製装身具の変遷」『古代学研究所紀要』第24号  
野島永・河野一隆2001「玉と鉄—弥生時代玉作り技術と交易—」『古代文化』第53巻第4号、財団法人古代学協会 37-51  
乗松真也2014「水晶製算盤玉の搬入」『太田原高州遺跡1』香川県教育委員会  
林巴奈夫1995『中国古玉器総説』吉川弘文館  
廣瀬時習1996「弥生・古墳期の玉の使用形態と意義—玉副葬の歴史的展開—」『文化史学』52、文化史学会

松本岩雄・三宅博士1977「平所遺跡」『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』鳥根県教育委員会

米田克彦2009「第3節 穿孔技術から見た出雲玉作の特質と系譜」鳥根県古代文化センター編『出雲玉作の特質に関する研究—古代出雲における玉作の研究Ⅲ—』

米田克彦2019「1～4世紀の日本列島における玉生産・玉文化と対外交流」『金官加耶出土玉を通してみた対外交流』国立金海博物館・東義大学校博物館合同シンポジウム資料

楊娥琳(訳・佐藤浩司)2019「韓半島出土水晶製多面玉の展開様相と特徴」『古文化談叢』第82集、九州古文化研究会

湯村功2017「西高江遺跡—弥生時代中期後葉の水晶製玉類の玉作工房—」『新鳥取県史 考古1 旧石器・縄文・弥生時代』鳥取県

### 【報告書】

大分県教育委員会1980『浜遺跡』大分県文化財調査報告第48輯

大宮町教育委員会1998『三坂神社墳墓群・三坂神社裏古墳群・有明古墳群・有明横穴群』京都府大宮町文化財調査報告書第14集

岡山県教育委員会1972「不老山東口古備前窯址、不老山西口古備前窯址、雄町遺跡、高島新屋敷調査区、船山遺跡、大門遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書1』

岡山県教育委員会1981『山陽自動車道建設に伴う発掘調査2 鴨方町内の遺跡』岡山県埋蔵文化財発掘調査報告42

岡山県教育委員会2004「ハヶ奥遺跡 ハヶ奥製鉄遺跡 岡遺跡 小坂古墳群 才地古墳群 才地遺跡」『岡山県埋蔵文化財発掘調査報告書』178

香川県教育委員会2014『太田原高州遺跡1』県道太田上町志度線道路改築工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告

唐津市教育委員会2004『天神ノ元遺跡(3)』唐津市文化財調査報告書第114集

河野一隆・野島永1997「丹後国営農地開発事業(東部・西部地区)関係遺跡 平成8年度発掘調査概要(2) 奈具岡遺跡(第7・8次)」『京都府遺跡調査概報』第76冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター  
倉敷市教育委員会1974「王墓山遺跡群」『倉敷考古館研究集報』第10号

北九州市芸術文化振興財団埋蔵文化財調査室2012『城野遺跡』北九州市埋蔵文化財調査報告書第471-472集  
財団法人鳥取県教育文化財団2004『久蔵峰北遺跡 蝮谷遺跡 岩本遺跡』鳥取県教育文化財団調査報告書89

大平村教育委員会1993『穴ヶ葉山遺跡』大平村文化財調査報告書第8集

鳥栖市教育委員会2003『フケ遺跡・神山遺跡・内畑遺跡』鳥栖市文化財調査報告書第70集

鳥取県2020『青谷上寺地遺跡15 第17次発掘調査報告書(第1分冊 本文編)』

鳥取県埋蔵文化財センター2013『玉・玉関連資料／鳥取県埋蔵文化財センター編集』鳥取県埋蔵文化財センター調査報告52、青谷上寺地遺跡出土品調査研究報告9

長崎県教育委員会1974『対馬 浅茅湾とその周辺の考古学調査』長崎県文化財調査報告書17集

前原市教育委員会2005『潤地頭給遺跡』前原市文化財調査報告書第89集

前原市教育委員会2006『潤地頭給遺跡Ⅰ(第Ⅲ区)一福岡県前原市立東風小学校建設に係る発掘調査報告書一』前原市文化財調査報告書第93集

増田孝彦・田代弘1993「奈具岡遺跡」『京都府遺跡調査概報』第55冊、(財)京都府埋蔵文化財調査研究セ

ンター

樋口隆康・釣田正哉1951「考古学調査報告 平戸の先史文化」『平戸学術調査報告』京都大学平戸学術調査団

福岡県教育委員会1979『九州縦貫自動車道関連埋蔵文化財調査報告』

福岡県教育委員会1980『若宮宮田工業団地関係埋蔵文化財調査報告書第2集』

福岡県教育委員会1983『三雲遺跡Ⅳ糸島郡前原町大字三雲所在遺跡群の調査』福岡県文化財調査報告書第65集

福岡県教育委員会1991「福岡県築上郡築城町所在安武・深田遺跡 安武・土井の内遺跡」『椎田バイパス関係埋蔵文化財調査報告』4

福岡県教育委員会1996『徳永川ノ上遺跡Ⅱ』一般国道10号線椎田道路関係埋蔵文化財調査報告第7集

福岡県教育委員会1997『九州縦貫自動車道関連埋蔵文化財調査報告書-VIII-』

福岡市教育委員会1996『吉武遺跡群Ⅶ』福岡市埋蔵文化財調査報告第461集

美津島町教育委員会1988『かがり松鼻遺跡』美津島町文化財調査報告書3

- 
- 1 本稿作成中に、岡山県浅口市の城殿山遺跡で弥生時代後期後半の墳墓から水晶玉製勾玉が出土したとの報(松尾2020)に接した。No.10墓では木棺の痕跡が確認され、右腕付近と推定される場所から、水晶玉勾玉1点とガラス玉9点が出土したとされる(松尾2020)。和田遺跡とは直線距離で5kmほど南西に位置し、弥生時代の墳墓副葬品としては初の出土事例になると思われる。松尾佳子2020「城殿山遺跡」『所報吉備』69 岡山県古代吉備文化財センター
  - 2 米田克彦による穿孔方法に着目した詳細な分類もあり、そこでは弥生時代から平安時代までの長期間におよぶ資料を対象にしており、弥生時代における時間的空間的特性についても論じている(米田2009)。筆者たちが全ての検討資料に対して穿孔方法の詳細を確認することができず、今回は主要な分類基準として扱わなかった。本稿では各型式の時空的特徴を考慮・記述する際の傍証要素として穿孔方法について記述することとする。
  - 3 大賀は玉類の体系化における「素材と製作技法、形状、法量等との間の密接な対応関係」を指標とすることの重要性を指摘し、彼の一連の玉類研究の基本的指針として、地域・集団ごとに素材の獲得から始まって生産された玉類を系統的に区別するため「系」の概念を用いている(大賀2002・2005・2009・2011)。ただ、水晶製玉類に関しては、水晶という特定地域に限定して産出する鉱物ではなく、特定の原産地が確定できるような組成分析などの理化学的分析が現時点では極めて少ない状態であり、「系」の設定には至らないとする(大賀2011)。
  - 4 河村好光は、彼の分類でのⅡb型式(長さ5~6mm未満で中央径とほぼ同じかやや横長のもの)つまり、本稿での有稜Ⅲ式について、丹後、山陰、北陸で製作され、山陰から近畿およびそれ以東の地域に流通したと指摘している(河村2010)。
  - 5 河村好光は彼の分類のⅡa型式(長さ7~8mmで中央径が5~6mmの縦長のもの)つまり本稿での有稜Ⅱ式は、後期後半から終末期に北部九州から瀬戸内の範囲に流通しているが、製作地の特定はできず、北部九州を中心とした地域での単独製作と予想している(河村2010)。
  - 6 資料実見の機会を与えていただいた湯村功氏のご厚意に感謝いたします。

# **A study of burial crystal balls in western Japan during the Yayoi period**

HRAGORI Tatsuya, TATEGAMI Yukako  
(Faculty of Law&Literature, Shimane University.  
Matsue City Sports and Culture Promotion Foundation)

## [Abstract]

The research area of the treatise is western Japan during the Yayoi period. The material to be analyzed is a crystal ball buried in the tomb. The purpose of the treatise is to clarify the burial customs of crystal balls in the area. Crystal balls are classified into six types: yuryo (有稜) Ia type, yuryo (有稜) Ib type, yuryo (有稜) II type, yuryo (有稜) III type, muryou (無稜) II type, muryou (無稜) III type. The secondary burial of crystal balls in western Japan begins in the middle of Middle Yayoi in northern Kyushu, and full-scale burials are held from the Late Yayoi. The Chugoku (中国)-Shikoku (四国) region is the center of the burial in the first half of Late Yayoi, and the Genkai-nada (玄界灘) coastal region is the center of the burial in the latter half of Late Yayoi. Sub-burials can be divided into four types according to the state of excavation. I thought it was mainly used as a Element for headdresses or earrings. From the latter half of the late Yayoi to the end of the Yayoi period, a certain set relationship of crystal balls + jade jasper balls + jasper tube balls + glass beads is formed along the coast of the Setonaikai (瀬戸内海) and Northern Kyushu.

Keywords: Yayoi period, western Japan, Burial Goods, crystal balls